

昭和43年7月1日第3種郵便物認可  
平成16年7月5日発行(毎月5日1回発行)  
第44巻7月号(通巻540号)

# 風土

7



大山蓮花

神蔵

器

母の日の亡母に大山蓮花咲く  
竹落葉浴びたく京に二日をり

「明月記」の余白に嵯峨の花菖蒲

藤原定家の時雨亭跡

夏空に小倉百人一首撤まく  
囀りや三帝陵を漲らし

てふてふと黒文字垣に添ひて行く  
水音の天へ上溝さくらかな  
羅に入る入徳門杏壇門  
楷若葉孔子の国の風そよぐ  
妻恋の御輿の荒ぶ夏祭  
マロニエ咲く母校の四一五室  
白薔薇や聖者となりて門を出づ

ニコライ堂



# 竹間集

同人作品



柿若葉

外川 玲子

はくれんや旅の終りの微笑  
花の息ふとひそめたる夜とおもふ  
掌にのせてなほ白炎の牡丹かな  
雪解風山毛櫨の根びらきはじまりぬ  
炭小屋のかたはらに散り雪もみぢ  
畳より日脚退く柿若葉  
まつすぐにさみしさ抜ける素足かな

葉ざくら

山田 暢子

蝶々の現れて日向のひろがりぬ  
頑な枝ぶり木瓜は朱を零し  
柏手のまばらに聞こゆ花の昼  
長閑かな檻に「ただ今準備中」  
あたたかやけやき通りにして通り  
葉ざくらや思ひ出一つ二つ三つ  
五月かな壁に掛けたる少女の絵

花の滝

門伝 史会

紅さして流れのしづく花の滝  
木の洞に虚空蔵菩薩雀の子  
山伏のかけ合ひ問答御開帳  
普賢象楊貴妃桜と山峡に  
林道や谷の底から花吹雪  
大本山遠巻きの山霞みけり  
プラタナス芽吹くゲートの小径かな

み 吉 野

— 関根 洋子 —

鳴きごゑの光となりて夏ひばり  
国宝の仁王門より毛虫落つ  
客 仏 の 蔵 王 権 現 日 雷  
するすると日除け広げて葛粉売る  
子燕に出入りを許す老舗かな  
水打つてまどかに暮す吉野人  
行宮の廊下の軋み花空木  
ほととぎす畳二枚の玉座かな  
桜の実紅し南朝哀史古る  
武士は死して寧ぐ立葵

筒鳥や幽きに後醍醐天皇陵  
夏大根供へ水分神祀る  
茄子の花上千本に生活あり  
西行を引き寄せて汲む苔清水  
草刈つて西行を待つ庵かな  
切り口の美しき薪棚麦の秋  
梅雨近し何処へ行きても陀羅尼助  
秘仏とは大山蓮華の如きかな  
黒々と蔵王堂立つ夕焼かな  
あしびきの吉野の山の落し文

# 山河集

同人作品



神蔵  
器選

チユーリップ浮棧橋にシエフの佇つ  
山桜鶏の蹴り出す土匂ふ  
潮騒の能登の紫雲英田鋤かれけり  
それまでは生き抜くつもり種を蒔く  
身の箍の一つ弾けし目借時

近藤幸二郎

鏡には許可を得てをり花衣  
竹の秋旧家に残る車井戸  
背文字なき赤き書物や復活祭  
石垣に並びて座る花疲れ  
永き日の魔法の切れし魔法瓶

保田英太郎

掌の錠剤に文字亀鳴けり  
さきがけて風となりあるつくづくし  
門に来るわたくし雨よ花ゆすら

間島あきら

帰雁かな天下分目の馬防柵  
夏隣大河の口のぎらぎらす

山桜一本六波羅蜜寺かな  
清水きよみずの舞台に花の客となり

布施まこと

まなざしは遠くに花の中千本  
木の芽風大涅槃図に真向へり  
吉野川渡りて春を惜しみけり

すれ違ふ虚子忌歸りの人にかな

中村洋子

朱印帖の丸印角印花の寺  
風光る木喰回国足跡図  
賜はるる仏の微笑風光る  
きざはしは二百八十七段糸桜

# 風土独語／神蔵 器



すみれ咲く盆栽町にまんが館

柴田 久子

四月の千早句会の吟行は、武蔵一の宮の氷川神社、大宮公園、盆栽町を歩き「盆栽四季の家」で句会ということであった。

まんが館は盆栽町のほぼ中央、句会場へ行く「かえで通り」に面してあった。表通りの門から、少し離れていたが立派な二階建ての館は目を引き「こんなところに漫画館」と驚き興味を持ったものの入館する時間もなく通り過ぎてしまった。句会の時「え、まんが館なんかあったの？」と驚いていた人もいたが、まんが館に気付いた人も、眼に映っただけで確かに把握し認識しなければ見なかつたことと同じである。

まんが館は市立で、ここに建設されたのには大宮市出身の著名な漫画家がおられるとか、それなりの理由がある筈であるが、ただ表を通り過ぎただけの私たちにも、盆栽町とまんが館の取り合せの意外性、違和感が妙に楽しく心をゆさぶるのである。

折紙のステゴザウルス雛に添ふ

遊橋恵美子

ステゴザウルスは恐竜の一種。『大辞林』によれば、中生代ジュラ紀に栄えた剣竜。全長は四〜一〇メートル、頭部が極端に小さ

い。背中に二列に並んだひし形の骨板をもち、四肢は太く、後肢より前肢の方が短い。尾の先に二対のスパイクをもつ、草食性である。恐竜の中でも子供たちに最も人気のあるのは、剣竜ステゴザウルスは遅足であったので武装が発達し、『大辞林』にあるように背中に対をなした大きな骨板と棘が並んだ異様な姿が、いかにも恐竜らしいからではなからうか。

ところで作者は「ステゴザウルス雛に添ふ」と詠っているが、この恐竜を雛に添わせたのは誰なのか。私は雛を飾ってもらった女の子の弟ではないかと思う。お姉さんのお雛さまの美しさに羨望と多少のねたみがあつて、僕の宝物ステゴザウルスを雛と並べて雛壇に飾ったものであろう。折紙であるのも微笑ましい。

藍麩の底ひに宿る五月闇

伊美岐秋子

この句には前書はないが、四月二十九、二十日の藤枝支部の吟行の所産で、かつての東海道五十三次の一つ由比の宿に由比正雪の生家を訪れたときのものである。

由比正雪は江戸初期の軍学者。多数の門人を集め、浪人を糾合して、家光死後、若年の家綱の人心の動揺、社会不安に乗じ幕府を転覆させようと蜂起した慶安の変の首謀者の生家は、意外にも創業四百年という紺屋であった。

間口は四間半、真ん中が入口で、腰板のあるガラス戸、上に「正雪紺屋」と横書に染め抜いた短い暖簾がかかり、入口の右側が部戸、左側がガラス戸、ガラスが波うっていたのもこの家の古さが想像された。正面の入口から真直ぐ通し土間になっており、右側の部戸の内側が店で、手拭やハンカチ、のれん、小物類がと

ころ狭しと陳列されていた。若いおかみさん風の人が店番をしていたが、売れても売れなくても関係は無いといった様子で、言葉少なくこりともしてくれなかった。

通し土間の左側が染め場で、大きな藍甕が四個ずつ四列、土間に埋めるようにしてあった。どの甕も長年使いこんだもので、なかには昨日まで使われていたのではないかと思われるほど藍の沁み込んで藍色の滲み浮き出している甕もあった。

#### 藍甕の底ひに宿る五月闇

この日は暦の上ではまだ春であったが、夏を思わせるよく晴れた日であった。そしてガラス戸を通して染場全体を明るくしていたが、藍甕の深い底の方へは光は達していなかった。藍の滲みた甕の底の暗さを五月闇と捉えたのは作者の手柄である。

#### そら豆の膨らみ初むや貸農園

島田 和子

そら豆は秋に種子を蒔く。貸農園などでは畑の隅に二と畝か、二た畝、少し高めに土を盛って蒔くのである。寒さには比較的強いので霜害などに注意して、無事に厳寒を過ぎれば、翌年春の到来とともに莖が急に伸び出す。そして間もなく花が咲き出し、花のあと次々と莢をつける。莢は一つずつ天へ向いて立ち（そのためそら豆の名がついた）、一つの莢には内部に普通三個、種類によつて二個の豆がはぐくまれる。豆は次第に大きく育つて、外側の莢にもはつきり膨らみが見られるようになる。かくて収穫は早いものは五月頃からで、貸農園では葉ものは別として、豆類ではもちろん、トマト、茄子、胡瓜などより早い収穫になるろう。

#### 父と子のはしり蚕豆とばしたり

桂 郎

がある。和子さんの句には人生のゆとりが感ぜられるが、桂郎の句には春窮の果ての微苦笑であろうか。

#### 方丈に掛かる卒園式次第 平田紀美子

お寺さんの中に幼稚園があるのは全国に実が多い。この寺の住職も広い境内を生かして幼稚園を建て、自ら園長か理事長をしているのではないか。

三月に入ると早々卒園式の式次第が決まり、その一部が方丈に掛けられている。もし、この式次第が幼稚園の中とか寺の本堂であれば住職の立場は違ってくるが、方丈であるため、よき園長先生が見えてくる。二年か三年か、間もなく卒園してゆく園児たち一人一人を思い浮かべながら、誰よりもなつかしく式次第を見詰めている園長先生である。

#### 畔道で転びげんげの花の中 磯野 たか

畦道で転んで、落ちたところはげんげの花の咲くところであった。なんと運のよいことであろう。たかさんはそう思つて暫くげんげの花に埋もれ、遠い少女の日にかえつて夢見ているような幸せを感じていた。

ところが帰宅して一週間も過ぎた頃から腋の下の方が痛くなり、結局七日間入院してしまつた。

「病院の近くにおいしいお菓子があつたので買って来ました」たかさんにはその後の打身の痛み、一週間の入院より、げんげの花の中のほんの一刻の体験の方がうれしかったのだらう。

# 風土集



## 神蔵器選

道順のはじめの社地虫出づ  
春草の市立つ武蔵一宮  
横浜 柴田 久子

春風やうたがひもたぬみくじ結ふ  
すみれ咲く盆栽町にまんが館  
聞き役となりし蝶々園巡る

東京 遊橋恵美子

復活祭前夜の月を見てゐたり  
亀鳴くやアトムに住民登録地  
桜しべ降る百五十ポンド加農砲  
桜しべ降る火入れ時刻の能舞台  
折紙のステゴザウルス雛に添ふ

注：ステゴザウルスは童世の空竜

保

囀やパントマイムの僧ふたり  
東京 田英太郎

春愁の色子にありて母になし  
こでまりや大病院車寄せ  
禁煙に時効はあらず春の風邪

啓蟄や火星に水のありし跡  
国東の仏と食べる菜飯かな  
卒業の午後には島と別れけり  
伊東 近藤幸三郎

直会の辛めの土筆煮上がりぬ  
綿菓子の膨らむを待つ春シヨール

御仏に角座向き合ふ春の雨  
本陣の固き門梅匂ふ  
千葉 池田光子

ゆるやかに空を流るるさくらかな  
筍を茹でこぼすなり七七忌

連翹のもつれてゐたり七七忌  
雨垂れのはげしくなりぬ燕の子

鳥帰る大和三山空に置き  
東京 陣野今日子

浅蜷掘る空に溶け込む大干潟  
カルデラの中の段畑葱坊主  
阿蘇外輪山峠立野の高菜飯